

## 雁金山の合戦

「取手」の名の由来でもある、大鹿の砦(とりで=取手)の城主の仇討ちの合戦を紹介します。

新木城城主であった田口内蔵之助の戦記『東国戦記実録』から「雁金山の合戦」を記したものです。

『東国戦記実録』には「一色宮内大鹿城ヲ攻ル事」、「荒木三河守小紋城ヲ乗取ル事附一色宮内千葉へ落ル事」の二項があります。これらの話は取手の人々の間に長く語り継がれた民話として残されました。



話は永禄年間(1558~1569)にさかのぼります。現在の利根川(当時は沼地であったといわれる)に沿って、[大鹿城主大鹿太郎左衛門](#)・[小文間城主一色宮内少輔政良](#)・[稲村城主高井十郎直徳](#)・[柴崎城主荒木三河守](#)らが勢力を持っていたといわれます。彼等はいずれも小田讃岐守氏治(筑波)に属していましたから、味方同士ということが言えるでしょう。この時期は、尾張の織田信長が、桶狭間の戦いで今川義元を破った頃で、各地の豪族達はいずれも多かれ少なかれ野心を持っていたものです。さて、[一色宮内政良](#)もそのような野心を持つ武将の一人でした。

数百年を経た今となっては、どのような因縁があったのかわかりませんが、日頃心よく思っていなかった[大鹿太郎左衛門](#)を討とうと一色は考えました。

永禄四年(1561)八月、密かに策をめぐらした政良は、配下三百余騎を従えて、自ら鎧に身をつつんで大鹿城へ向ったのです。大鹿城では、政良の企てなど知らぬ[太郎左衛門](#)ですから、[のんきに釣などしていたところ](#)、一人の家来が駆けつけて、一色宮内が兵を率いて攻め寄せて来ると告げます。[\(民話では風邪気味で志気低下とあります\)](#)

[太郎左衛門](#)は何かの間違ひと思いましたが、すでに敵の押し寄せる声が近づいていたので、城兵に急いで戦いの準備をするよう命令したのです。そして、老臣の[染谷刑部](#)に城を守らせ、自らは百五十騎ばかりを率いて城の外へ打って出たのです。

一色勢も大鹿勢も一進一退の戦いぶりでしたが、準備の整っていた一色勢が次第に優勢となりました。

一色勢の[矢作若狭](#)・[平本備前](#)の活躍はめざましく、ついに大鹿勢を城中へ押し返して城中へ飛び込みました。

大鹿勢の[山崎隼人](#)もよくこれを防いで戦いましたが、ついに矢作若狭に討ち取られました。大鹿太郎左衛門の手勢は三十騎に減り、まわりを一色勢に囲まれてしまいました。もはやこれまでという時、太郎左衛門の[臣姥原但馬](#)が困んでいる一色勢に切りかかり、囲みの一部をくずしました。この機に乗じて[太郎左衛門](#)は城外へ逃れたのです。

これを見た平本備前は太郎左衛門を追い弓を射かけると、[太郎左衛門](#)の横腹に命中しました。

[太郎左衛門](#)の首をとろうと平本備前が襲いかかりましたが、[染谷刑部](#)等が辛うじてこれを防ぎ、[太郎左衛門](#)は落ちてゆきました。太郎左衛門は[姥原但馬](#)の肩をかりて逃げてゆきましたが、一行の前に突然武器に身を固めた一団があらわれました。一瞬追手かと思われたのですが、実は大鹿勢を加勢しようとした[高井十郎直徳](#)の一行でした。

[直徳](#)は瀕死の[太郎左衛門](#)を自らの城へ送らせ、自分は一色宮内を討とうと、配下の[寺田弾正](#)・[寺田与左衛門](#)・[姥原掃部](#)・[姥原左京](#)・[山崎将監](#)・[松崎平馬](#)・[猪瀬内蔵之助](#)・[横張采女](#)など二百騎を従えて大鹿城へ向いました。

一色宮内の大鹿城不意打ちの報はまたたく間に広がり柴崎城主荒木三河守にも伝わりました。

三河守は政良の振舞いを怒り、大鹿勢に加勢することにしました。そして政良不在の小文間城を落そうと利根川を渡りました。田口内蔵之助・山口舎人・粟飯原十郎・河村山城・我孫子五郎左衛門等の三百騎で小文間城を囲むと、小文間城の留守を守る宮川左馬之助は、城に残った兵を集めてみたものの三十騎にすぎず、仕方がないので女子供と裏門から逃げました。三河守は難なく小文間城を落しましたが、河村山城の進言により、帰城する小文間勢を雁金山で挟み打ちにしようと決めました。

三河守は自ら二百騎を率いて雁金山に布陣し、百騎程を山の南におきました。

一方大鹿城では、高井十郎と一色宮内が戦っていました。勝敗はなかなかつきませんでした。小文間城から逃げてきた宮川左馬之助が小文間城落城の知らせを届けると、政良は急拠兵をまとめて小文間へ向いました。

直徳は機をのがさずこれを追ったが、政良の足が早く、打撃を与えるには至りませんでした。

雁金山へ陣をしく荒木三河守に向って、人馬の地響きが伝わってきます。よく見ると、小文間を目指して走る一色勢です。三河守は、一色勢が一町ほどに迫った時、一斉に弓を放たせました。一色勢はいきなり攻撃されて最初は劣勢でしたが、次第に力を盛り返し、逆に荒木勢を攻めはじめました。三河守はこれを見ると自ら先陣を駆けて志気を高めようと思いました。雁金山の南に陣をしく河村山城は、この時とばかり一色勢に攻撃を仕懸けました。

ここへ駆けつけたのは高井十郎直徳です。直徳は一色勢を追って小文間までやって来たのです。見れば荒木三河守と一色宮内の軍勢が戦っています。直徳は荒木勢に加勢するようにと部下に命令を下しました。

荒木勢に挟み打ちをかけられ、さらに高井勢に側面を襲われた一色勢はひとたまりもありません。

総崩れとなって政良を守る二十騎ほどになってしまいました。矢作若狭・平本備前の二人は政良へどこでもよいから落ちのびるように進言しました。あとは矢作と平本で頑張るということでしょう。二人は敵陣へと切り込みます。その間隙について政良は馬で逃げてゆきます。

これを見た直徳が、部下に命じて大将の政良を討たそうとしましたが、矢作・平本の奮戦で討ち果すことはできませんでした。矢作・平本の二人は、手兵をすべて討ち取られ、利根川端まで逃げましたが、直徳の手勢がうちかかり逃げ場を失なってしまいました。遂に二人は川に飛び込んでしまいました。

それでもなお、追手は矢を放ちましたが、二人を討つことができず、二人は対岸へたどりついたといわれます。

荒木三河守・高井十郎は小文間城へ入城しさらに大鹿城へ移りお互いに饗応しあいました。

そこへ大鹿太郎左衛門の臣蛭原但馬があらわれ、太郎左衛門の死を伝えました。

荒木・高井ともにその死を哀みましたが、すぐに大鹿城の守りについて語り合い、大鹿城には寺田弾正と寺田与八郎に守らせ、小文間城には青柳図書・吉田六郎兵衛をあてました。これが決まると、二人はそれぞれ自分の城へ帰っていったのです。 「取手市史、民俗編」より。

新木 2652 の田口宅の"久太夫のかやの木"合計7本の大樹木は市指定の保全樹木で、周辺一帯は緑豊かな樹林帯になっています。家主の田口久太夫氏は新木城主の田口倉之助(蔵ではなく倉)の後裔(こういん)といわれています。

しばしば取りざたされる「取っ手(とって=兆番、ハンドルや摘まみをいう)」説があります、しかし「取っ手」につながる歴史は全くなく、「取手」は「砦」が起源とされています。

又、取手の歴史には、「平将門が砦を築く」との諸説を唱えている書物があるようですが、雁金山の合戦に登場する、大鹿太郎左衛門の先代大鹿左衛門之丈織部時平が井野の地(現井野台の城山観音)に砦を築き、後に大鹿山へ砦を移したとされています。将門が築城した砦など取手旧市内に存在した形跡も文献もありません。

取手としての漢字文字の使い方としてはさまざまあり、その一部を紹介すると取出があります、取出は取手の「手」の字が「出」と記されています、現在でも取手市台宿のチューリップ幼稚園裏の空地の石仏の台座で確認することができます、他に「鳥手」「鳥出」などと記述された古文書や歴史書が見つかっています。